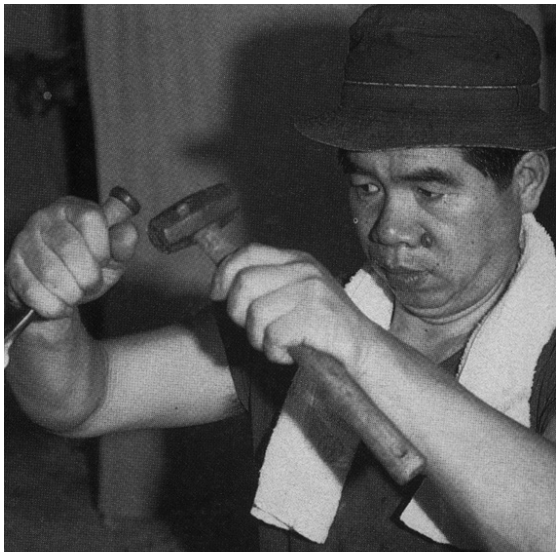
夢追い人

自然を大切に。寅さんの心で…

寅さん工房　　民芸木工家　神野恒彦さん



自称「大川の寅さん」。話してみると、なるほど容姿も性格も似ているような気がする。複数の友人が、「寅さんに似ているから、寅さん工房にしたら……」と言う、提案を受け入れて、それがそのまま会社名に。

職人気質にありがちな、へんに構えたところがない。作品づくりについて「自分の感じたことや思っていることをありのままぶつけているだけですよ」と素っ気ない。

それでいて、「寅さん」は、自然をかなり大切にする。丸太の外側の部分や虫が食っていたり、腐った節(死に節)でさえ、生かそうとする。大川では振り向きもされないが、「どんな木でも努力次第で変わるのは人間と同じ。丸太一本買ったなら、どこも捨てずに使う自信がある。」と言う。確かにその作品は、ユニークで個性派ぞろいだ。素朴でそのままの木の表情がほのぼのとさせる。

「寅さん」の作品には、確かな技術の裏打ちがある。昭和30年代の厳しい徒弟制度のなかで育った世代だからである。欄間を習った。3、4年すると、彫刻を覚えた。月給3、000円の生活が、6、7年つづいた。そして、26歳で独立。

ただ、苦労して独立したとたん、オイルショックによる、彫刻不景気に見舞われた。しかし、ここで落胆する寅さんでなかった。彫刻は仲間と競合すると言うことで、なんとおもちゃづくりに転向を思い立つ。しばらくはその方向で…。ただこれもあまりよろしくない。そこで、現在取り組んでいる、いす、テーブルづくりに軌道修正。現在に至る。

ところで、一風変わったアート性の高い、製品作りのアイデアはどこからくるのだろうか。「仲間との語らいの中でひらめくことが多いね。」そのアイデアを自分の個性に合わせ、作品に作り上げるそうだ。

最後に寅さん創作の、いすでなく、詩をご紹介しよう。

強情にして、くせのある
かわりもん
柔軟にして、あてがある
曲がりもん
創造とロマンを秘めた
個性豊かな
木々との共生の
語らい…
神野恒彦

人も人間も努力次第で
生まれ変わる

苦境を生き抜く
アートの生命力

神野恒彦。1945年生まれ。長崎県北高来郡出身。高校卒業後、大川の建具職人の下へ弟子入り。70年頃から彫刻を手がける。26歳で独立。最近は創作いす、テーブルがメイン。木の素朴な風合いを生かした作品をグループ展などで発表している。